

小中高・大学における AI活用に関する比較調査

eラーニング戦略研究所
eLearning Strategy Research Institute

目次

調査概要

P.3

サマリ

P.6

1. 教員のAI活用は小中高・大学ともに浸透。大学では「ほぼ毎日」の利用が多い
2. 児童生徒・学生にも広がるAI活用——利用状況・用途には違いがみられる
3. 大学の半数超がAI利用ガイドラインを整備。小中高では「ルールなし」が4割超
4. 小中高は「教員研修」、大学は「不正利用対策」——求める支援にそれぞれの特徴

調査結果

P.11

1. 教員によるAI活用
2. 児童生徒・学生のAI活用
3. ルール・運用
4. 課題と支援

調査概要

本レポートについて

eラーニング戦略研究所では、2026年に「小中高におけるAI活用実態調査」「大学におけるAI活用実態調査」をそれぞれ実施し、調査結果を公開しました。

本レポートは、新たに実施した調査ではなく、これら2つの調査結果をもとに再編した比較レポートです。

小中高と大学におけるAI活用の共通点や特徴を把握できるよう、比較可能な項目を中心に結果を横断的に整理しています。

調査概要

調査目的	2026年に実施した「小中高におけるAI活用実態調査」と「大学におけるAI活用実態調査」の結果をもとに、学校段階による共通点や特徴を明らかにし、教育機関におけるAI活用の現状を俯瞰する。※本レポートでは、以降「生成AI」を「AI」と表記する。
調査手法	アンケート専門サイトを用いたWebアンケート調査
調査期間	小中高調査：2026年4月20日～4月23日 大学調査：2026年7月2日～7月8日
調査対象者	小中高調査：小学校、中学校、高校の校長、副校長／教頭、主幹教諭、主任教員、ICT担当教員、一般教員 大学調査：国公立大学、私立大学の教授、准教授、講師、助教、特任教授・客員教授（いずれも常勤教員）
有効回答数	小中高調査：133名　大学調査：115名
実施主体	eラーニング戦略研究所

※小中高調査と大学調査では、一部の設問・選択肢が異なります。本レポートでは、比較可能な項目を中心に結果を整理しています。

サマリ

1. 教員のAI活用は小中高・大学ともに浸透。大学では「ほぼ毎日」の利用が多い

- 1 「ほぼ毎日」または「週数回」AIを利用する教員は、小中高63.1%、大学71.3%となり、いずれも6割を超えた。大学では「ほぼ毎日」の利用が31.3%と、小中高の19.5%を上回っている。
- 2 主なAI利用用途は、校務では、小中高・大学ともに資料作成や企画・アイデア出しとなっている。授業準備では、双方とも「教材作成」が50.4%で最も多く、課題・試験問題の作成や解説・補足資料の作成にもAIが利用されている。
- 3 大学ではさらに、91.3%が研究活動でAIを利用しており、「翻訳・英文作成」「論文や資料の要約」「文献検索・整理」が上位を占めた。
- 4 AIを教育現場にとって「有用」と考える教員は、小中高88.7%、大学89.6%と、いずれも約9割に上る。

2. 児童生徒・学生にも広がるAI活用——利用状況・用途には違いがみられる

- 1 児童生徒・学生のAI利用については、大学では「学生が自主的に利用していることを把握している」が58.3%と最も多かった。一方、小中高では25.6%にとどまり、「自主利用の可能性はあるが把握していない」が33.8%、「利用していない（またはほとんどない）」が21.8%となった。
- 2 児童生徒・学生のAI利用用途にも違いがみられた。小中高では「調べ学習」が76.3%で最も多く、「発表資料作成」「探究学習」が続いた。
- 3 大学では「レポート作成」が82.9%で最も多く、「情報収集・整理」「プレゼン資料作成」「翻訳・語学学習」など幅広い用途で利用されている。
- 4 児童生徒・学生のAI利用について、大学では「思考力の低下につながる懸念」「依存が進む懸念」がそれぞれ6割を超え、小中高を上回った。
- 5 一方、小中高・大学ともに「情報活用能力の向上」「学習理解の促進」など、AI利用による教育効果を評価する回答もみられた。

3. 大学の半数超がAI利用ガイドラインを整備。小中高では「ルールなし」が4割超

- 1 児童生徒・学生のAI利用に関して「利用に関するガイドラインがある」とした回答は、小中高28.6%、大学52.2%だった。一方、「特にルールはない」は小中高45.1%、大学13.9%となった。
- 2 提出物におけるAI利用について「特に定めていない」は、小中高60.9%、大学46.1%。大学では、申告・明記を必須または任意で求める、あるいは提出物でのAI利用を禁止するなど、何らかの方針を定めている割合が小中高より高かった。
- 3 本調査の独自分析であるAI活用成熟度については、小中高では「Lv4：組織運用」が42.1%、「Lv2：限定導入」が43.6%、大学では「Lv3：ルール整備」が36.5%、「Lv4：組織運用」が33.9%となった。
- 4 なお、小中高調査と大学調査では成熟度の段階名称は共通しているものの、判定に使用した設問や条件が異なるため、構成比の単純な優劣比較を行うものではない。

4. 小中高は「教員研修」、大学は「不正利用対策」——求める支援にそれぞれの特徴

- 1 AI利用に関する懸念では、小中高・大学ともに「誤った情報の生成」「思考力や学力の低下」などが上位となった。
- 2 とくに大学では「思考力や学力の低下」が82.6%と高く、大学独自項目の「レポート不正」も73.0%に上った。一方、「個人情報の取り扱い」は小中高43.6%、大学28.7%で、小中高の方が高かった。
- 3 今後必要とされる支援について、小中高では「教員向け研修の充実」が63.2%で最も多く、「活用事例や指導方法の共有」が続いた。大学では「盗用・不正利用の検知機能」が60.9%で最も多く、「教員向け研修」「安全に利用できるAI環境」「活用事例や指導方法の共有」も約5割となった。
- 4 小中高と大学ではAI活用が広がる領域や利用上の課題に共通点がある一方、児童生徒・学生の利用実態、ルール整備、求められる支援には学校段階による特徴がみられる結果となった。

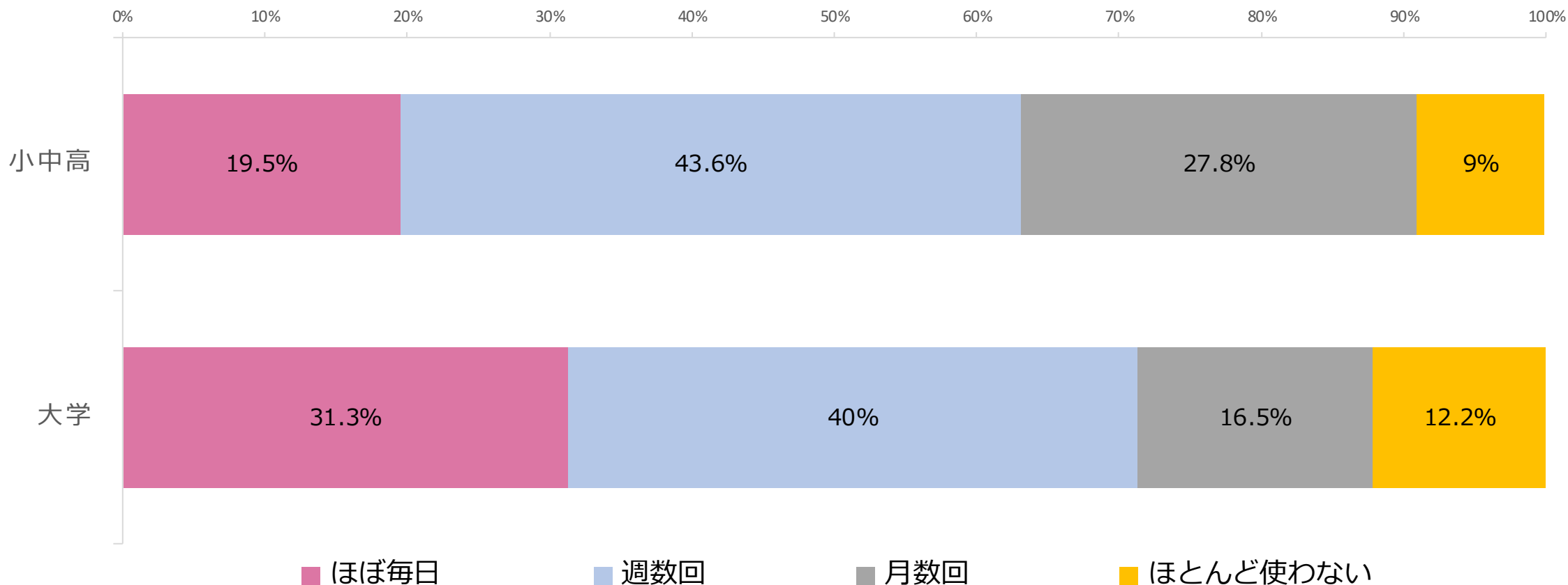
調査結果

1. 教員によるAI活用

調査結果

1-1. 利用頻度

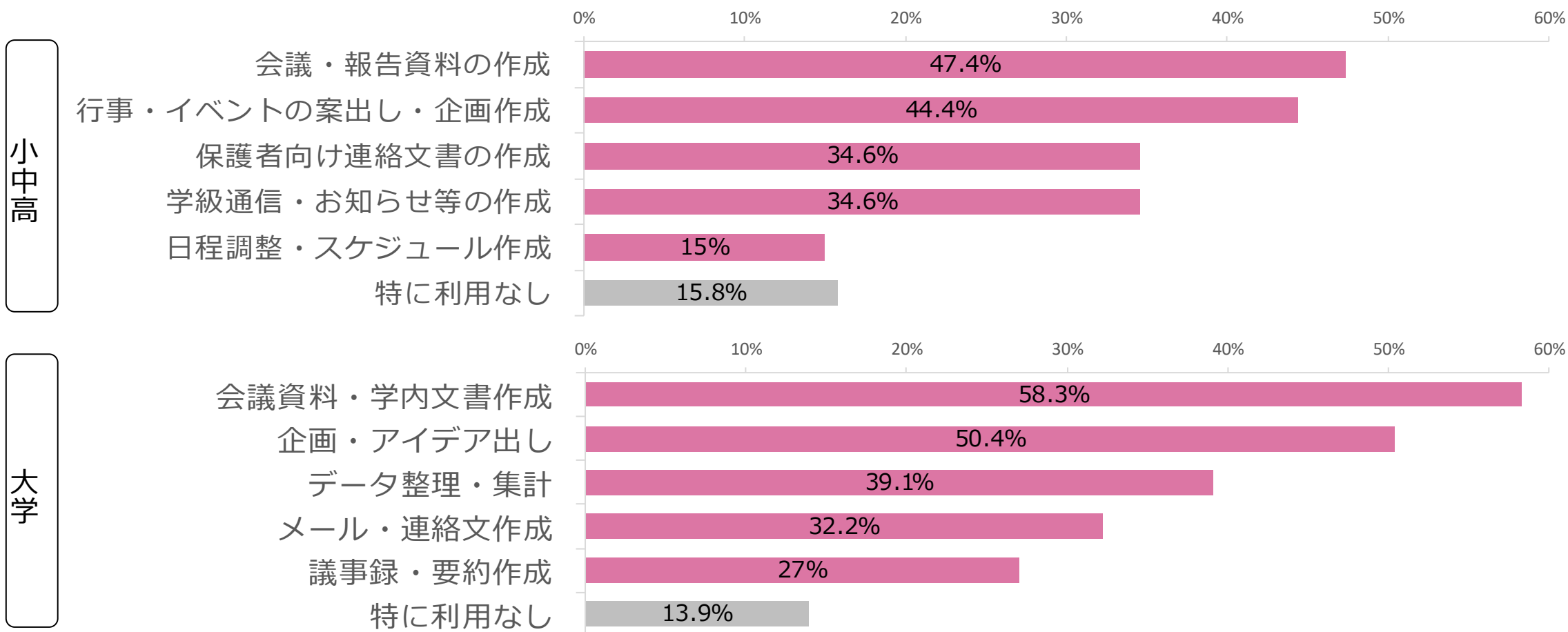
「ほぼ毎日」または「週数回」AIを利用する教員は、小中高63.1%、大学71.3%。大学では「ほぼ毎日」の割合が小中高を上回る。



調査結果

1-2. 校務における利用

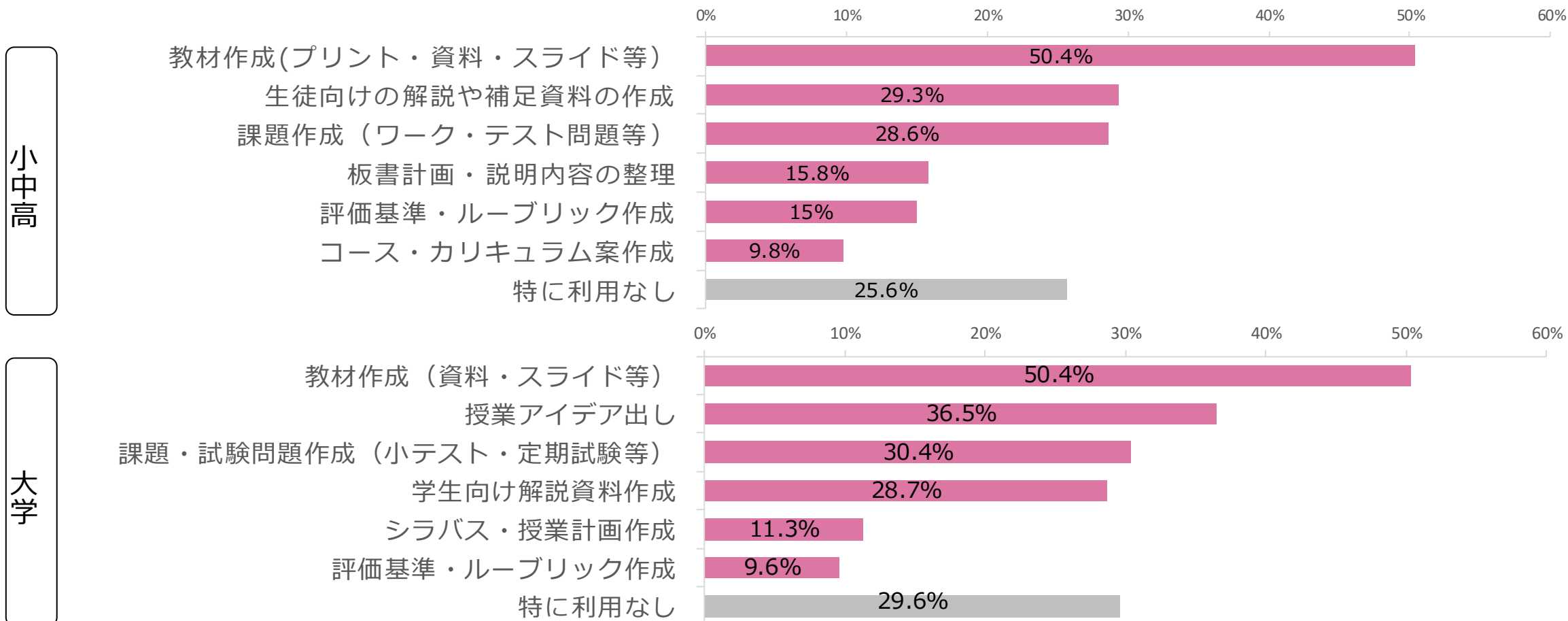
小中高・大学ともに、資料作成や企画・アイデア出しでの利用が上位。大学では「会議資料・学内文書作成」が58.3%と最も高い。



調査結果

1-3. 授業準備における利用

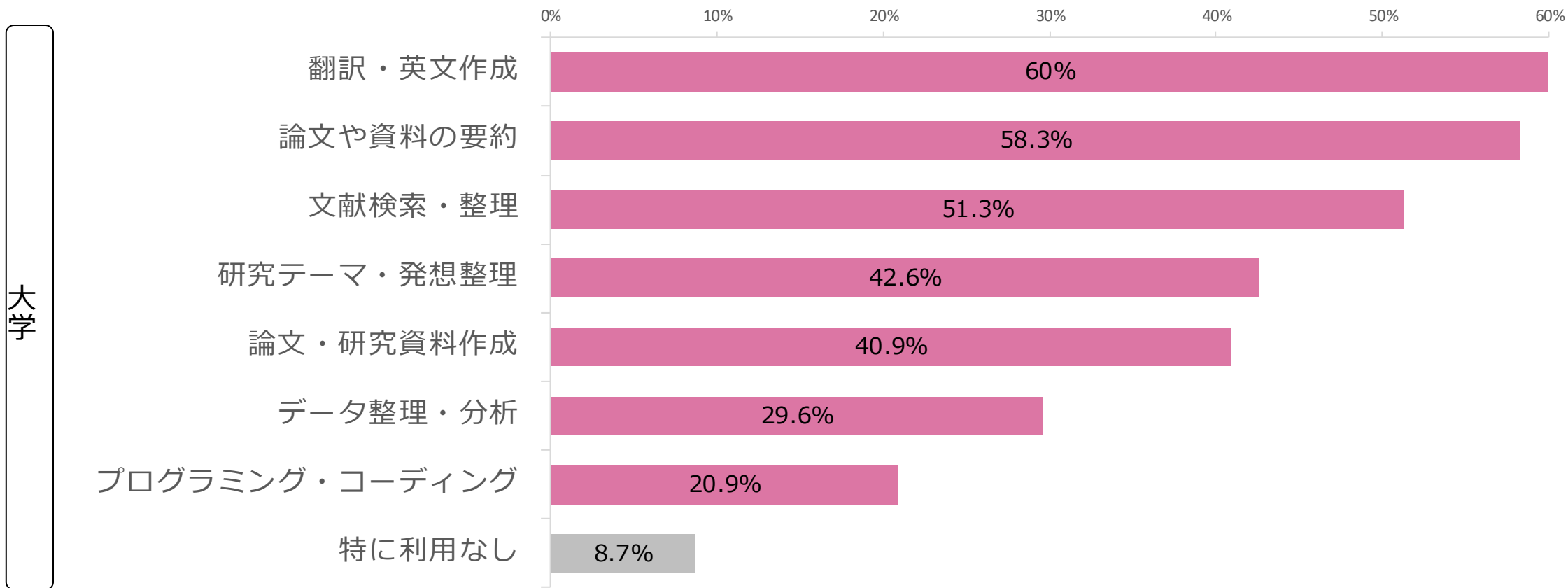
小中高・大学ともに「教材作成」が50.4%で最も高い。課題作成や解説・補足資料の作成でも、双方でAIが利用されている。



調査結果

1-4. 研究活動における利用

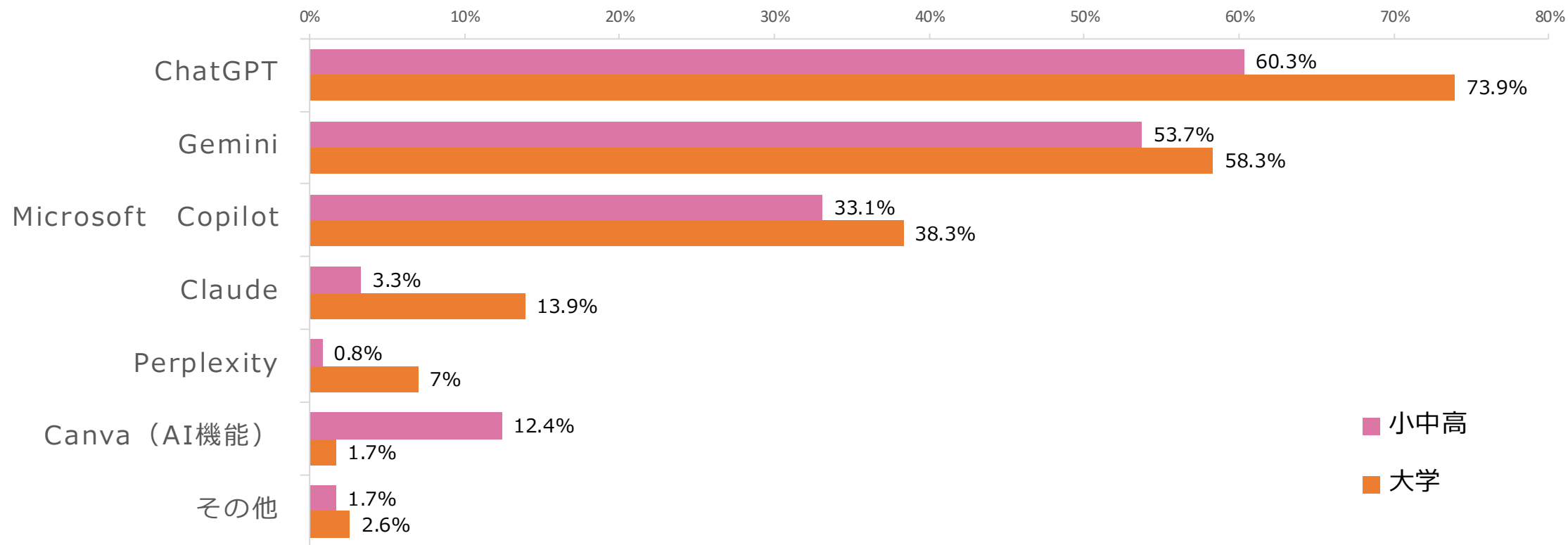
研究活動でAIを利用している教員は91.3%。「翻訳・英文作成」（60%）、「論文や資料の要約」（58.3%）、「文献検索・整理」（51.3%）が上位となっている。



調査結果

1-5. 利用しているAIサービス

小中高・大学ともに「ChatGPT」の利用が最も多く、「Gemini」「Microsoft Copilot」が続く。大学ではChatGPTの利用が73.9%と、小中高の60.3%を上回る。

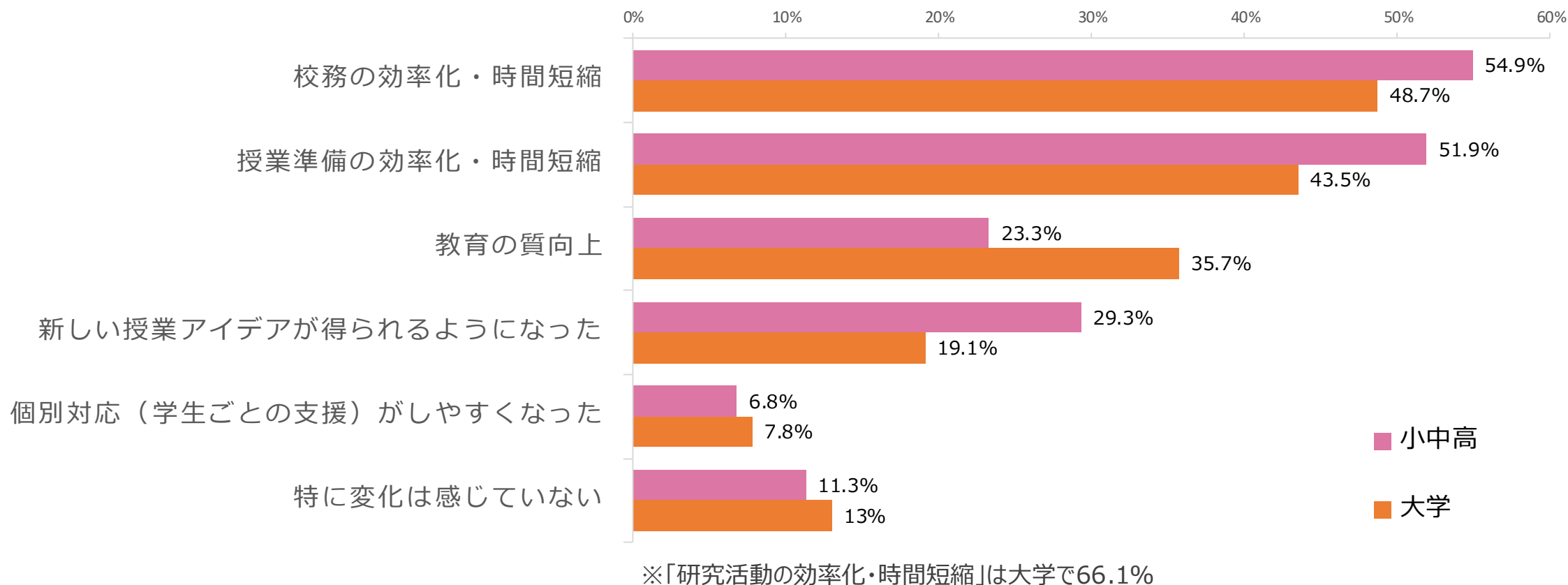


※「学校・教育委員会が提供・指定している生成AIツール」は小中高で9.1%

調査結果

1-6. 効果実感

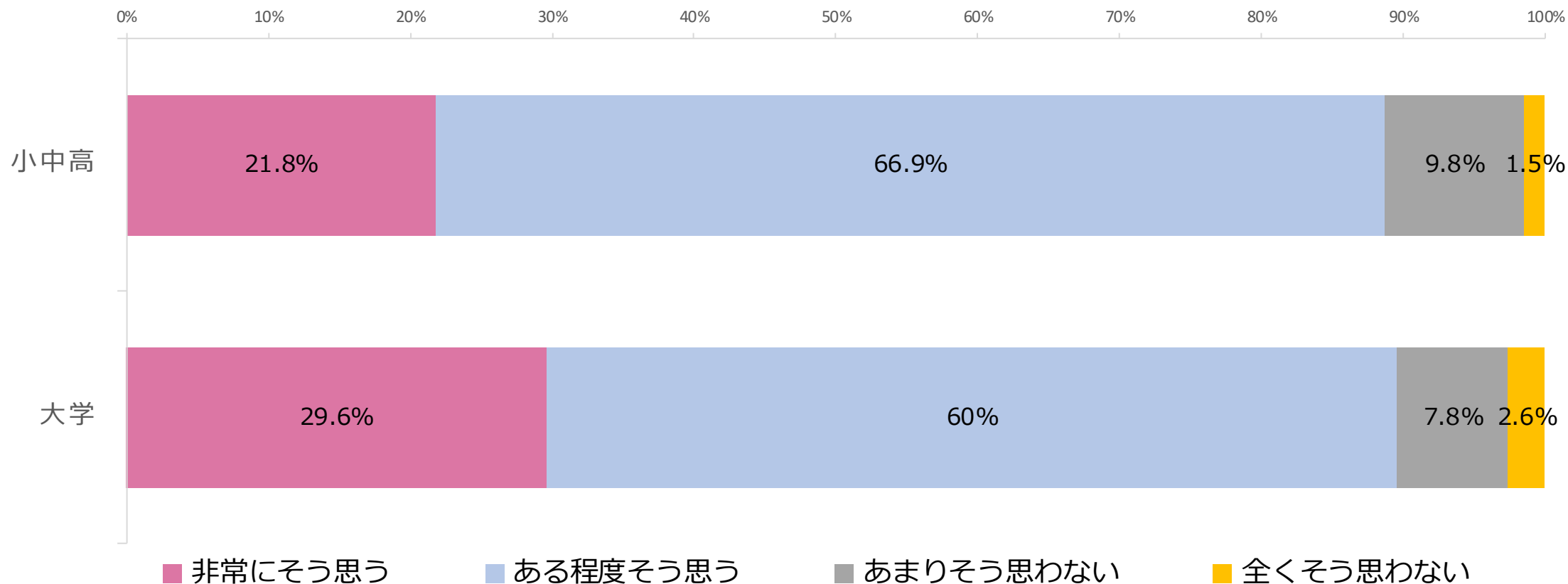
小中高・大学ともに「校務の効率化・時間短縮」「授業準備の効率化・時間短縮」が上位。大学では「教育の質向上」が35.7%で、小中高の23.3%を上回る。



調査結果

1-7. 有用性

AIを教育現場にとって「有用」と考える教員は、小中高88.7%、大学89.6%と、いずれも約9割を占める。



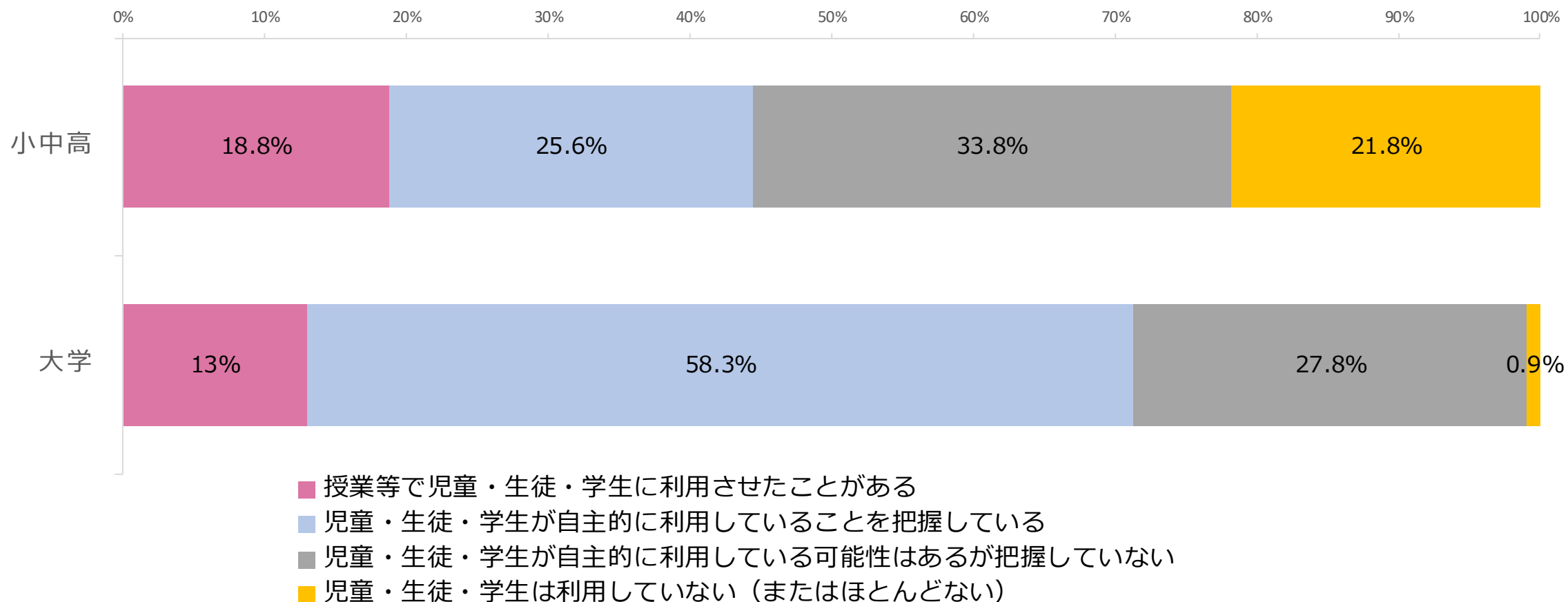
調査結果

2. 児童生徒・学生のAI活用

調査結果

2-1. 児童生徒・学生のAI利用状況

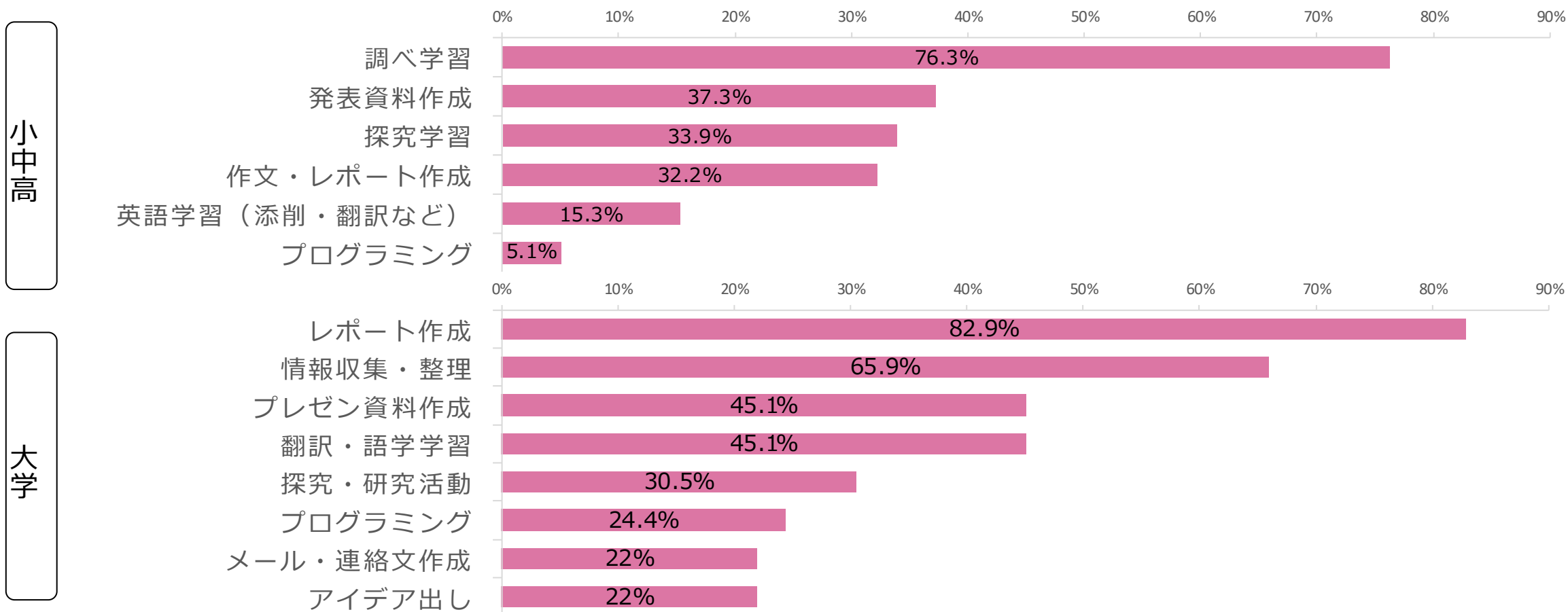
大学では「学生が自主的に利用していることを把握している」が58.3%と最も多い。一方、小中高では「児童生徒は利用していない（またはほとんどない）」が21.8%で、大学の0.9%との差がみられる。



調査結果

2-2. 児童生徒・学生のAI利用用途

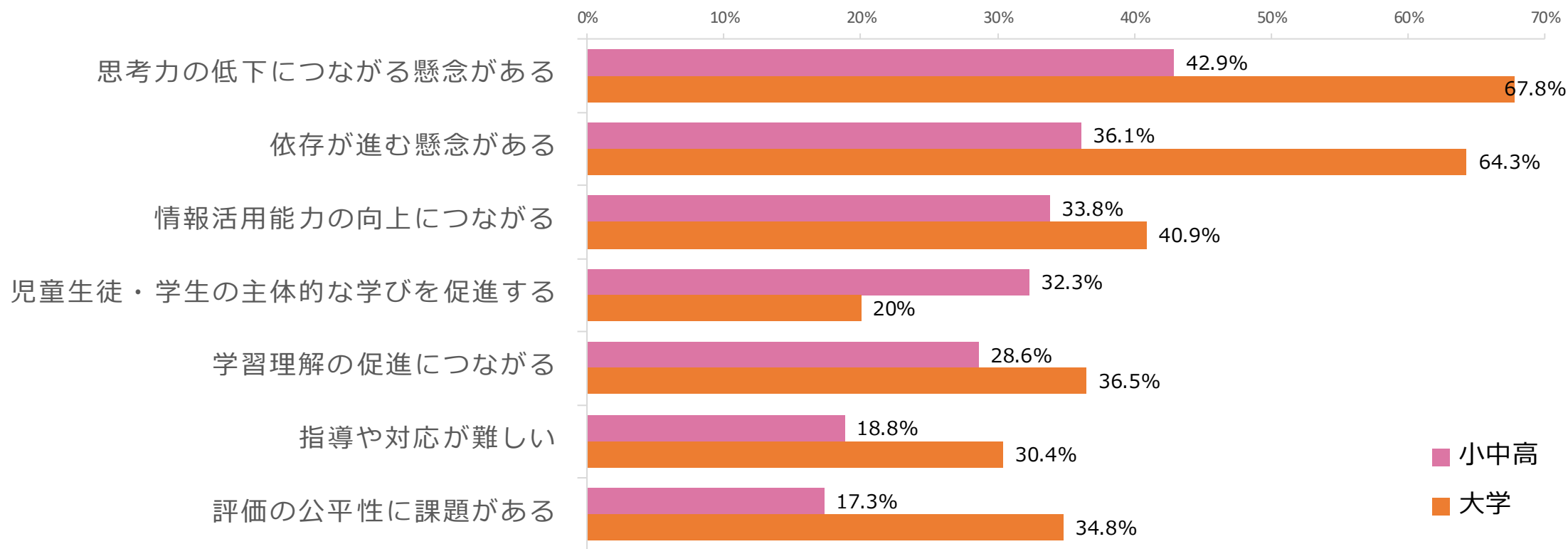
小中高では「調べ学習」が76.3%で最も多く、大学では「レポート作成」が82.9%で最も多い。児童生徒・学生の利用用途には、学校段階による違いがみられる。 ※児童生徒・学生のAI利用を把握している回答者を対象



調査結果

2-3. 児童生徒・学生のAI利用に対する教員認識

大学では「思考力の低下につながる懸念」（67.8%）、「依存が進む懸念」（64.3%）が小中高を大きく上回る。一方、両者とも「情報活用能力の向上」など、AI利用の効果を評価する回答もみられる。



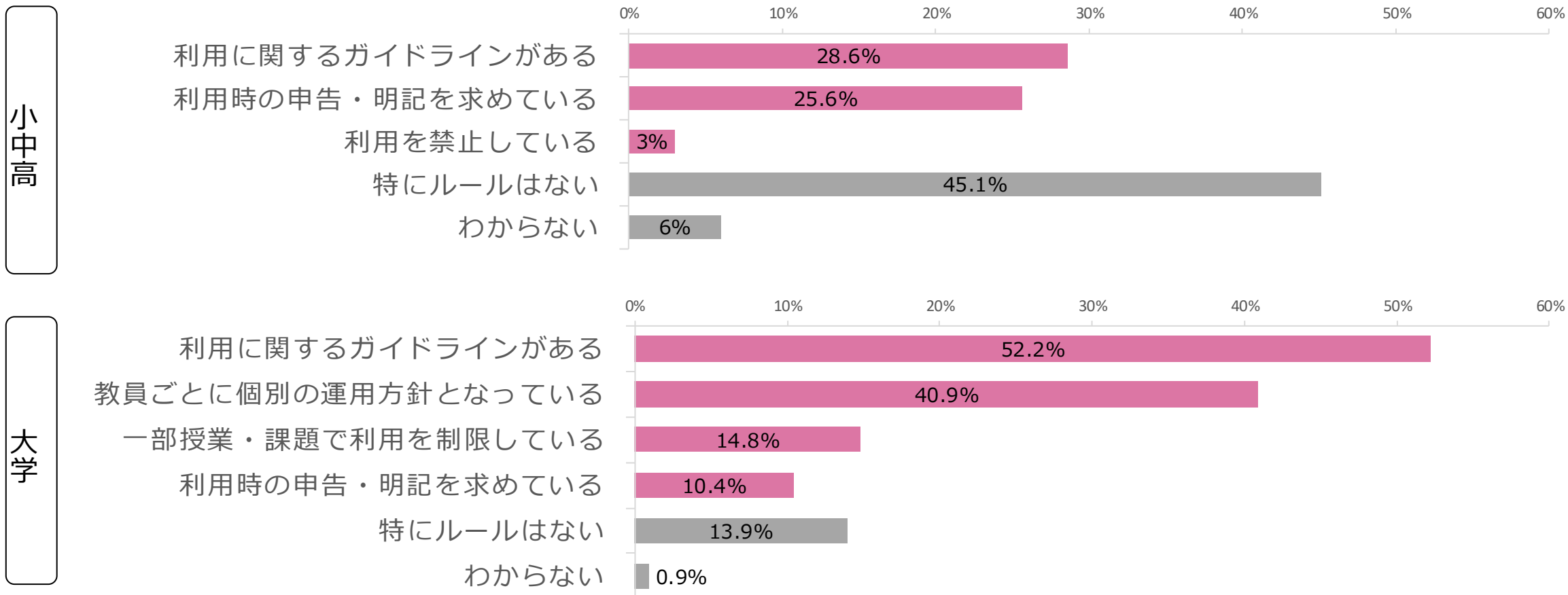
調査結果

3. ルール・運用

調査結果

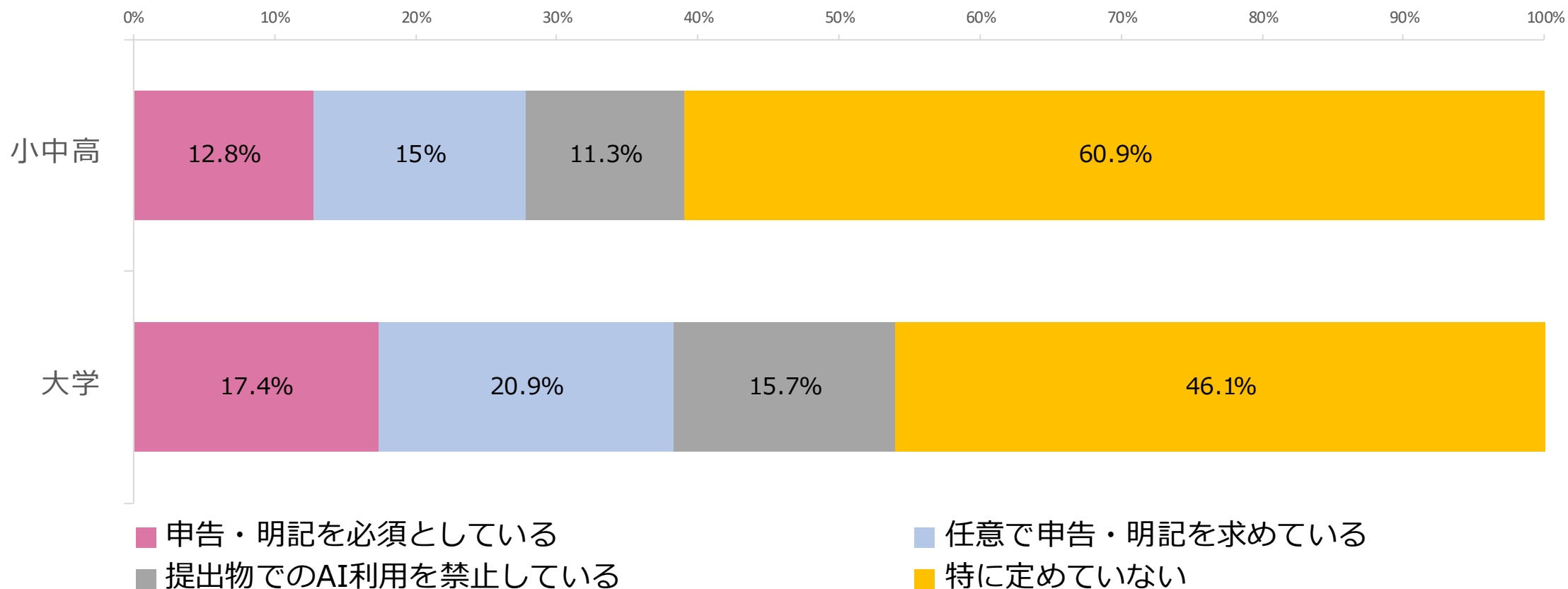
3-1. 利用に関するルール

大学では「利用に関するガイドラインがある」が52.2%で、小中高の28.6%を上回る。一方、小中高では「特にルールはない」が45.1%を占める。※小中高の「利用時の申告を求めている」「AI利用箇所の明記を求めている」のいずれかを選択した回答者を「利用時の申告・明記を求めている」として再集計。



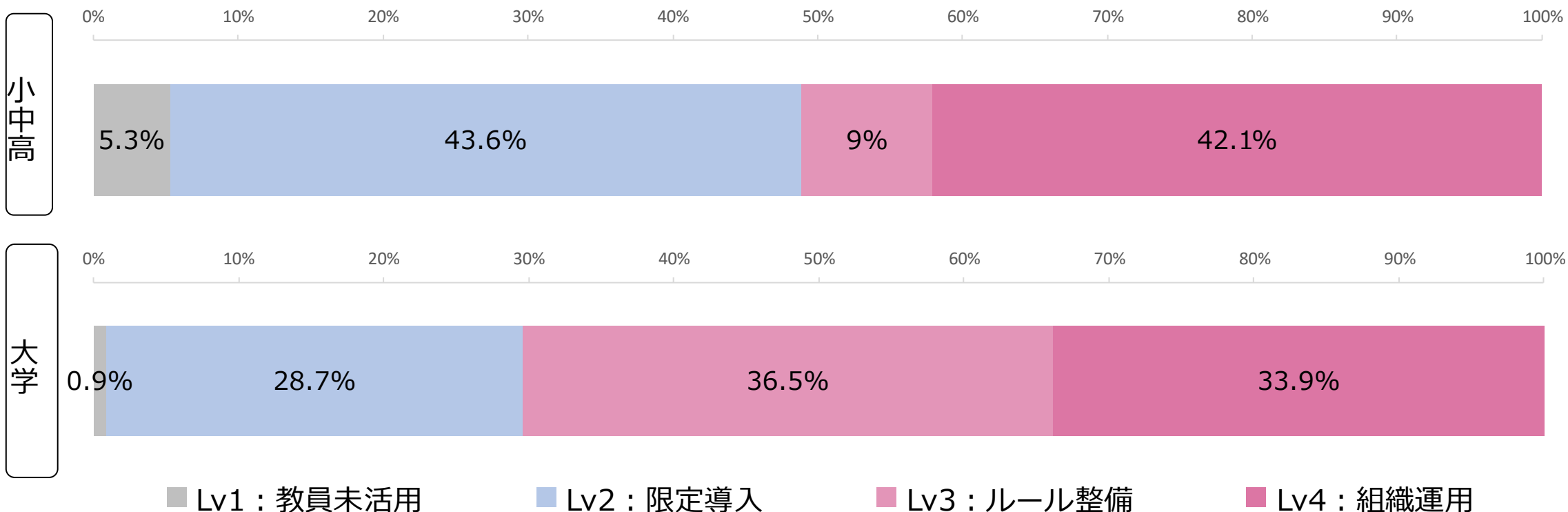
調査結果 3-2. 提出物におけるAI利用の申告・明記

提出物でのAI利用について「特に定めていない」は、小中高60.9%、大学46.1%。大学では、必須・任意の申告や利用禁止など、何らかの方針を定めている割合が小中高より高い。



調査結果 3-3. AI活用成熟度

小中高ではLv4「組織運用」が42.1%、大学ではLv3「ルール整備」が36.5%、Lv4「組織運用」が33.9%となっている。両調査では成熟度の判定条件が異なるため、それぞれの調査内における活用段階の分布として捉える必要がある。



※小中高調査と大学調査では、成熟度の段階名称は共通していますが、判定に使用した設問および条件が異なります。このため、本図は各調査における活用段階の分布を示すものであり、構成比の単純な優劣比較を目的としたものではありません。

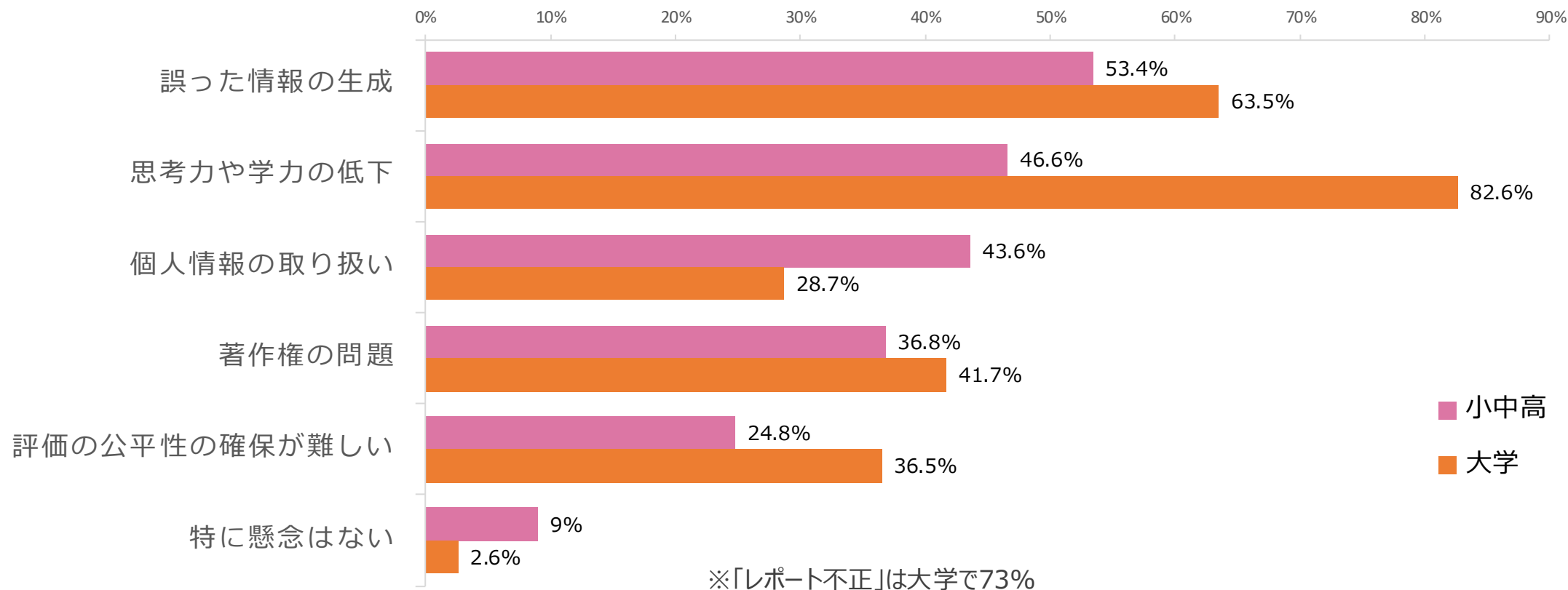
調査結果

4. 課題と支援

調査結果

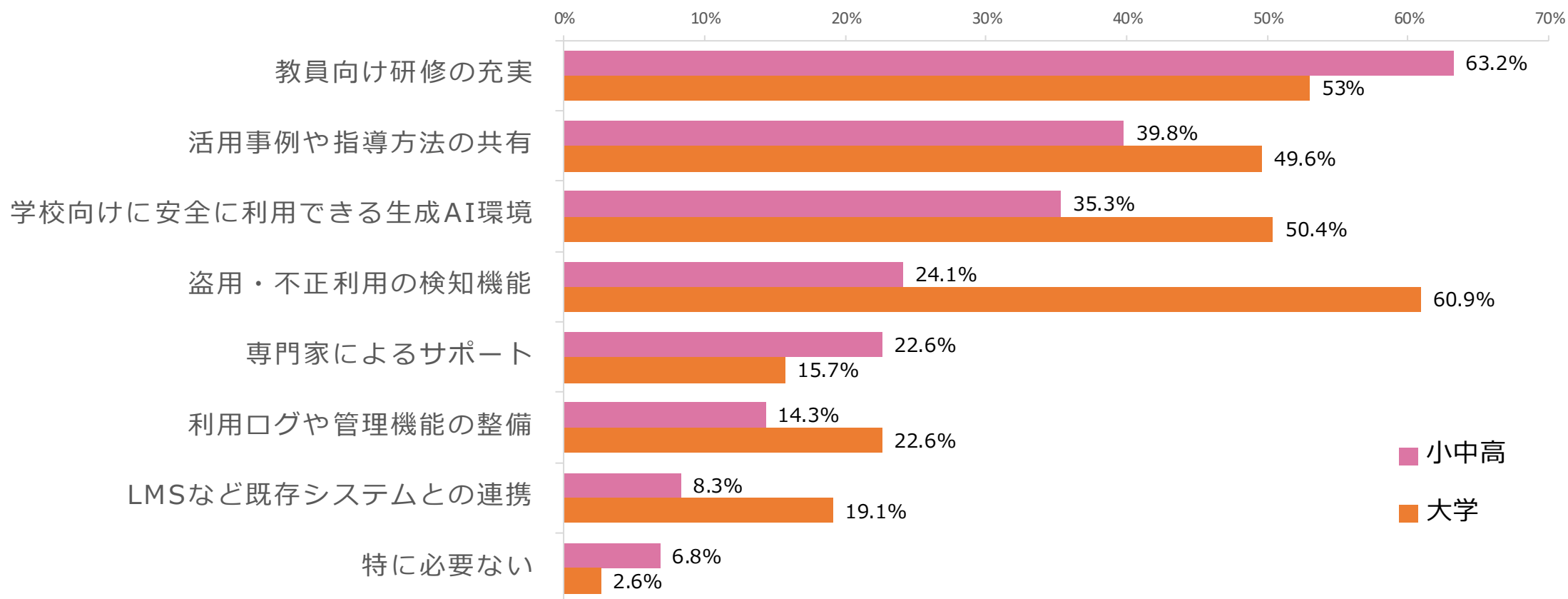
4-1. 懸念

大学では「思考力や学力の低下」が82.6%と最も高く、小中高の46.6%を大きく上回る。一方、「個人情報の取り扱い」は小中高43.6%、大学28.7%となっている。



調査結果 4-2. 求められる支援

小中高では「教員向け研修の充実」が63.2%で最も高く、大学では「盗用・不正利用の検知機能」が60.9%で最も高い。求められる支援の重点に違いがみられる。



小中高と大学におけるAI活用比較調査報告書

デジタル・ナレッジ 調査



2026年9月発行

発行元：株式会社デジタル・ナレッジ「eラーニング戦略研究所」

〒110-0005 東京都台東区上野5丁目3番4号 eラーニング・ラボ 秋葉原

Tel. 03-5846-2131／Fax. 03-5846-2132

<https://www.digital-knowledge.co.jp/>

(禁無断転載・転用・複写)